

第1章十姉妹はどこから来たのか？



▲これが十姉妹のルーツのコシジロキンパラ

●十姉妹のルーツは中国だ

十姉妹は江戸時代の宝暦12年(1762年)に中国の乍浦(さほ)という港から寧波船(にんぼうせん)に乗って長崎へ来た。今から250年程前のことである。では中国から来た十姉妹はどんな姿だったのだろうか？

それは現在、私たちが飼育している黒十姉妹と同じだ。ただ体はひと回り程大きいけど、色彩も模様もまったく変わらない。これまで十姉妹は、アミメやスイギンチョウなどの交雑種といわれてきたが、それは間違い。飼っている黒十姉妹とまったく変わらない。それは上海で野生の十姉妹を見ての結論だ。



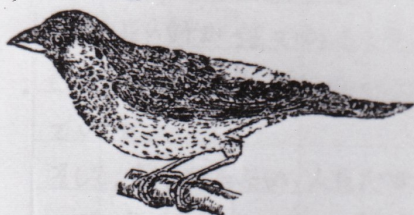
▲十姉妹の掛け軸

●十姉妹は倉から米を盗み出す害鳥だ

日本では十姉妹を可愛いといって飼う人が多い。だが、中国では飼う人はいない。それは昔から「透倉」と呼ばれ、倉から米を盗む、害鳥という認識があるからだ。日本でいうとスズメに当たる。日本でもスズメを飼う人はいないだろう。それと同じだ。

ところが中国でも、十姉妹の絵も数多く描かれている。それは多産で、群れで飛び、いかにも平和の鳥という印象だからだ。台湾の故宮博物館にも、ニューヨークの美術館でも中国人の画家による十姉妹の絵がある。ここに紹介する絵は沈南蘋の「群鳥奇竹図」である。十姉妹が多産のため、縁起のいい画題として描かれているのだ。

狀、稍形突出、以蔽風雨。巢常營於松、杉、棕櫚等常綠樹上。卵純白無斑。此鳥於冬寒時仍恆羣集於舊巢內、形影相隨不離、因又有「十姊妹」的雅號。



第 71 圖 白腰文鳥 ×1/4

上體發皆栗褐色、僅下背灰白、腰部轉為淡褐色、而具有白而黃的羽幹。兩翼黑褐色。尾深黑、中央尾羽特伸長而末端尖銳。嘴周、頰、頰及喉等概黑褐色。胸及尾下覆羽淡黃褐色。腹白、並具有淡褐色圈紋、但不顯著。

這種鳥性好結羣、常棲息於阡陌叢莽間、檢拾穀粒為食。飛翔速而呈波狀。鳴聲若簫、短促而微韻、似為「女——女——」。性鈞笨不靈。曾經一次見有四鳥同棲於一枝上、獵人舉槍擊落其中三個、而餘一鳥仍屹然不動、此鳥不靈如此、實是出乎意外。

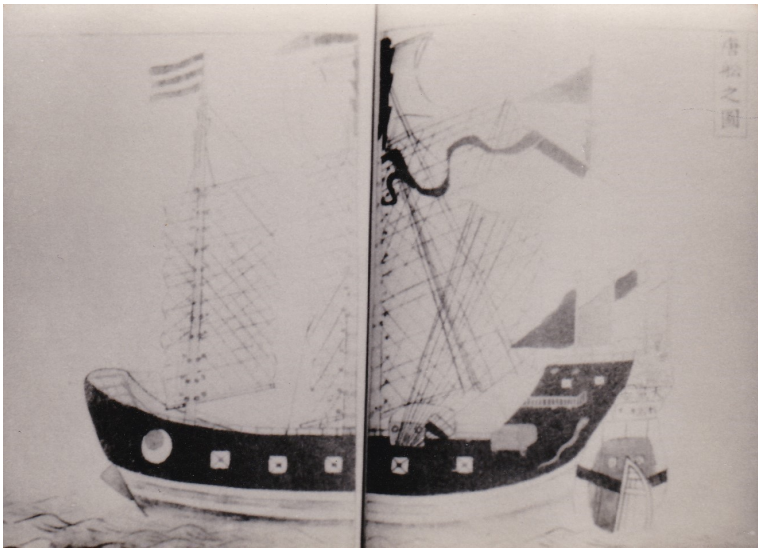
麻雀 為門庭常見的一種鳥、雖三尺童孺亦莫不熟知它、是以復有家雀、老家賊等別名。

●白腰文鳥と呼ばれていた

十姉妹という名は俗名で、学術的には「白腰文鳥」と中国では呼ばれている。白腰とは、黒十姉妹の腰の部分の白いからだ。文鳥とは鳥の姿から来ている。ところが、別に「算名鳥」とか「看名鳥」とも呼ばれている。それは算名(さんめい)とか看名(かんめい)というのは、占いことである。つまりかつての中国では、十姉妹のヒナを巣から取り、それを手乗りにして、オミクジを引かせ、吉や凶を占っていたのだ。

台湾の夜市へ行くと、露店で手乗り文鳥にオミクジを引かせ、運勢を占っている。白文鳥なら見栄えがいいが、黒十姉妹では見栄えが悪い。そこで黒十姉妹から白文鳥に取って変わったのだ。昔から手乗り十姉妹は存在していた。だから占いの鳥として、かつてはさげすまれていたのである。

▲『中国的鳥類』より



●江戸時代に長崎へやって来た！

中国から来た黒十姉妹は、寧波船の船尾の鳥小屋に文鳥や紅雀などと共に入れて運ばれて来た。長崎に荷揚げされると奉行所の検閲を受ける。その時、中国商人から中国での呼称から餌の種類まで聞き取る。十姉妹の中国の発音はシーツーメイ。当時、長崎では、字ずらからジウシバイと呼んだ。ところが江戸ではジウシマツと呼んだ。これは間違いだという。しかし、江戸で、そう呼ばれたのだから仕方がない。

では十姉妹とはどんな意味なのか。多くの書物には姉妹のように仲が良いからといわれている。

しかし、それは違う。諸橋轍次著「大漢和辞典」には「中国では、十姉妹をジフシマイと読ませ、渤海の古俗で、婦人がお互いに約束してお互いの夫の行を観察すること」としている。つまり渤海とは、かつて満州東部に起きた国で、8世紀から10世紀に勢力をふるった国である。その渤海では留守を守る婦人達が団結して、戦場に出た夫の浮気や行状を監視するという古いしきたりがあった。そのため帰国した男たちから、戦場での夫の行方や行状を騒がしく聞き、それを詮索した。その声が十姉妹のようにやかましいということから、その名前がついた。朝早くいっせいに鳴き叫ぶ十姉妹の声は騒がしい。その声からも状況が分かるだろう。

▲寧波船に乗ってやって来た



▲台湾の故宮博物館にある十姉妹図では「偷鳥」と呼んだ



▲草むらからカメラを見る野生の十姉妹

●上海で野生の十姉妹を発見！

中国産の十姉妹を見たのは、2012年6月3日だ。私が、上海の名所「豫園」の古城公園へ行った時である。ここではメジロやガビチョウの鳴き声を聴く“鳴き合わせ会”が、早朝から行われていた。小高い公園で、周囲はケヤキや竹ヤブに被われ、多くの中国人の愛鳥家が集まり、野鳥のさえずりを聴いて、楽しんでいた。その時、突然ケヤキの葉が騒がしく揺れ、7、8羽の黒い鳥が舞いサッと降りて来た。よく見ると黒い十姉妹である。私は慌ててカメラのシャッターを切った。切りながらじっくり観察すると、それが野生の十姉妹だ。飼育している黒十姉妹そのものである。そういえば、この公園は江戸時代に十姉妹を長崎へ送った乍浦という港に近い。つまり、ここにいた野生の十姉妹を、そのまま船に乗せ、長崎へ送ったのだ。まさにここが十姉妹のルーツの地なのである。

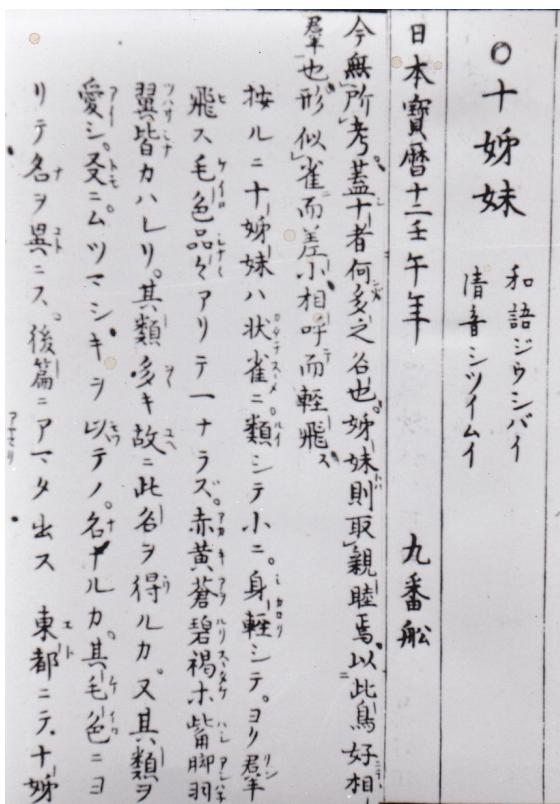


●江戸時代の十姉妹

江戸時代に描かれた十姉妹の絵がある。この絵はイギリスの大英博物館に所蔵されているもので、浮世絵師の北尾政美が描いた「十姉妹図」である。

上に描いている鳥は、十姉妹だが、下の鳥は相思鳥である。江戸時代は十姉妹をヘキチョウやキンパラ、相思鳥など外国から渡来した小型の鳥を総称して“十姉妹”と呼んでいたのである。

▲大英博物館に所蔵されていた「十姉妹図」



●十姉妹の飼い方

十姉妹は宝暦12年(1762年)に寧波船の九番船に乗って長崎へやって来た。長崎の出島には長崎奉行所があり、輸入された鳥を厳しくチェックし、その鳥の中国名や餌、飼い方などを聞いた。それというのも、これらの唐鳥を買い上げるのは將軍を始めとする武士階級の人たちだったからである。

十姉妹が渡来して10年後に城西山人巨川が書いた「唐鳥秘伝百千鳥」を見ると、次のような記述がある。「十姉妹 餌かい キビ、モミ、米、アワ、巢は春秋なすなり、随分能子の出来る物にて世話なく。文鳥のごとく独りそだてあぐる也。玉子は十六日にてかえる。巢につきたる日を書付おきて。十二、三日前より、きみ粟のもやしを作り置き。かえる日あたりよりはや入れておきてよし。夏はもやし早く出来し安し。秋の末頃は出来遅し心得有べし。子がかえりたる日より二十三、四にて巢を出る物也。春秋も早く出来たる子は、もはや其の秋、直ぐに子をなす物なり」とある。

▲「唐鳥秘伝百千鳥」より



●十四満津とも書かれた

上記の「唐鳥秘伝百千鳥」を書いた城西山人巨川というのは、160石の直参旗本である。江戸時代は小鳥の飼育熱が盛んで、將軍から大名や旗本、豪商、戯作者などが飼った。「南総里見八犬伝」の滝沢馬琴も十姉妹を飼っていた。この絵を描き、十四満津と書いたのは、増山灌園という画号を持つ伊勢長島藩主である。つまり江戸時代で十姉妹を飼っていたのは、このような高級武士であったのだ。十姉妹が一般庶民に飼われるようになったのは、昭和初期からである。

▲十満津という当て字が面白い

武士階級には、文鳥と共に人気があった



●佐竹曙山の描いた「文鳥と十姉妹図」

この絵は、秋田藩主佐竹曙山が描いたものである。なぜ藩主が描いたかという、江戸時代は、将軍を始め多くの大名が唐鳥を飼育していた。それは8代将軍徳川吉宗が、大変な動物好きでオランダ商人が献上したヤン・ヨンストンスの「動物図鑑」を見て、見知らぬ動物を中国商人に依頼し、渡来させたのだ。ゾウやラクダのほかに華麗な鳥類もいた。その中に十姉妹や文鳥の姿もあった。当時は唐鳥ということで高価なため、将軍や大名などが飼った。この文鳥や十姉妹も佐竹藩主が江戸の藩邸で描いたものである。

当時、将軍家慶がヨーロッパの鳩にこり、美しい洋鳩を図譜にして大名に配り、若年寄りの堀田正敦が『堀田禽譜』や『鶴文禽譜』の鳥類図鑑を自主出版していた。そのため鳥の絵を描くことが藩主として社交的にも重要だったのである。

▲写実的に十姉妹を描いている

当時の鳥屋は、小鳥から犬、ニワトリ、アヒルまで売っていた



この絵は、寛政10年(1798年)に、「摂津名所図絵」に描かれたもので、当時の鳥屋の様子がよく分かる。店の中央にはイヌの狝がおり、鳥カゴにはインコがいて、キジやアヒル、ニワトリも見られる。

客は武士が中心だ。唐鳥や鳴きのいいウグイスを求めに来たのだろう。江戸ではウグイスの鳴き合わせ会が、武士の間では盛んに開催されていた。

右手では、ニワトリや鴨類を調理している。つまり鳥屋は、飼い鳥から鳥肉まで販売していたのである。江戸では日本橋や京橋で十数軒あったという。十姉妹もこんな店で販売されていたのだ。

▲「摂津名所図会」より